

委ねられる課程

保育園年少

安心して委ねる環境の中で培う、保育士(他者)や友だちとの関係づくり

子どもは心のよりどころとなる関係づくりが、環境に自らを解き放っていくことへつながっていきます。それは家庭であれば父母であり、保育園の場であれば受け入れてくれる保育士であり、ともに遊ぶ友だちとの関係の中で培われます。自己発揮によって遊び込む体験が、学習対象への没入経験の基礎を創ることにつながっていきます。ときに、葛藤やいざこざ等が生じ、様々な対象や周囲との関係の中で、すり合わせをしなければならない場面に出会います。このときこそ、「自己調整能力」や「交渉能力」を育む「とき」であると言えます。年少・年中時代には、身体感覚を伴いながら総合的に実感することを通して、様々な事象への対応を学んでいきます。

様々な事象・対象との出会いから学ぶ課程

保育園年中

遊び込む体験によって生じる葛藤を通して、自己調整と交渉の基盤づくり

保育園年長

幼年期の終わりから小学校にかけては、「学ぶということはどういうことなのか」という学びの意味を知り、学び方を身に付ける時期です。これらの学びは、先生から教わることも大事ですが、友だちの意見や考えを聴いて、そこから学んだり、それに対して違う意見を言ったりして一緒に考えていく、協同し学び合う力が大事になることを、子どもたちが学んでいくことが重要です。

「認められている私」という安心感と自信をもち、対象との関係づくりをしていく子ども
認められていることを実感する

- × 「わかった？」 → ○ 「隣同士で確認してみて」
- 「友だちの考えを聴くと、いろいろな考えがわかって面白いよ」
- 「○○の考えにどう思いますか」のような開いた質問
- 友の意見にうなずく、よい聴き方をしている子を褒める。
- × 「はい」「いいえ」で答えられる閉ざした質問

安心した環境の中で、愛着を抱いてもものと一体となって浸り込む体験的な学びづくり

自己と感情を調整する力は「学びに向かう力」につながる

- ・「物事をあきらめずに、挑戦できる」
- ・「人の話が終わるまで静かに聞ける」
- ・「自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりする」このような自己調整力は「学びに向かう力」へとつながる。

前期
小1～小4
主体性・社会性を培う課程

保育園年長

小学 1年 小学 2年 小学 3年 小学 4年

これまでの経験やそれによる思いや願いを基に、五感を総動員して、対象に働き掛けていく。その中で、自他のつながりを少しずつ感じながら、対象が自分事になっていくプロセスを通して、主体性や社会性を培っていく。

子どもたちが求めているのは、挑戦したくなる課題でわくわく感や「遊びがい」!

幼児期の遊びでは、子どもたちは主体的に挑戦して遊び、満足感を得ていました。このような姿を保育園から小学校へつなげていかなければなりません。挑戦したくなる課題とは、子どもに「ああ、知っている」「答えがわかっている」と思わせない内容のことです。一つの課題をいろいろな追求していく、アイデアを出し合いながら追求していく内容です。子どものすごさは、自分一人できそうな簡単なものは、やろうとしません。むしろ、みんなで工夫しなければできない課題を好んでやっています。そうした子どもをワクワクさせる内容が「挑戦したくなる課題」となります。

感性を総動員しながら学ぶ子ども!

この時期の子どもたちは、匂いからものを想像したり、触れたりしながら形の硬さや柔らかさなどの質感を感じたり、雰囲気や温度差を感じとっていきます。鳴き声から動物の物まねを試みたり、思い描いたりもします。こうした自らの感性を総動員して、「ひと・もの・こと」に働きかけながら、自分の身の回りの事象に学んでいきます。

中期
小5～中1
思考力を高める課程

小学 5年

小学 6年 中学 1年

友と協同したり、自己に問いかけたりしながら、物事を多面的・多角的に見つめ、その理を追究する学びが繰り返されるようになる。このような他者とかかわり、自分と結び付けながら自力で課題を解決する学びを通して、子どもたちは思考力を高めていく。

※ 協同的な探究は、問い続ける思考力を高めます。そこには、互いに補い合いながら問い続ける子どもの姿が実現します。

対象(ひと・もの・こと)との対話の中で学んできた子どもが、友だちとともに創り、探り、求めていくことに充足感を抱き始めます。一人ではなかなか導き出せない課題に対しても、友だちの考えやアイデアに触発され、探求心を持ち続けながら自身に問う(自己内対話)姿、課題に問い続ける姿が見られるようになります。このような姿は、どの子どもも学び甲斐と喜びを保障する中で生まれる姿です。

後期
中2～中3
自己の生き方を深める課程

中学 2年

中学 3年

より広く社会とかかわる中で、願いや課題を抱いた子どもたちは、協同と対話による学びによって、社会を見つめその理を広く自分と関係づけていく。このような学びを通して、自己の生き方を深めていく。

※ 「自らの生活を拓く自律する学習者」を指向します。

体験的な学び(前期)、物事の根拠を探る学び(中期)を経て、義務教育9年間を終えようとする後期は、より質の高い協同的な学びを行う必要があります。それは、卒業後、就職並びに進学を、それぞれの生徒が自らの意志決定で自己選択していく現実があるからです。卒業と同時に、一村民として、一市民として生活を営んでいく生徒、また進学する生徒にとって、今までの学校生活で培った友だちと補い合いながら学び続けることが、場面を変えて続いていきます。したがって、「今、学んでいることの意味や価値」を実感できる学びを保障し、生徒が「自らの生活を拓く学び」につなげていく必要があります。

